

後 記

新田敏先生に徹底的に教え込まれたことは、研究テーマに関する資料を全て（一つ残らず）集めること、収集した資料を引用する際には、その内容が正しいかどうか、必ず裏を取ることに、論文を書く際には、記述の一つ一つに注を付し、その根拠・出典を具体的に明示することであった。

こんなエピソードがある。それは、新田先生と片山直也・北居功・七戸克彦で大学の近所で食事していたとき、どうした経緯か日照権の話になって、先生は「欲しい資料が見つからない」とおっしゃった。「ヘルマン・コンラッドの本の中に、中世ドイツにも日照権が存在した旨の記述があるのだが、その出典が書かれていないため、論文で引用することができない」とおっしゃるのである。コンラッドといえば、ドイツ法制史の大権威である。「そのまま引用してはいけませんか」と質問したわれわれに、先生は、「せめて二個以上、それも同じ学者ではなく、別の文献を引用したいのだ」と答えられた。「コンラッドがそのように言っている、というのではなく、事実がそうになっている、ということを書きたいのだ」とも。

この話は、われわれに強烈な衝撃を与えた。それから数年が経って、ふとしたきっかけで、片山が七戸に「せめて

二個以上の文献を参照しなければ」と話しかけてから、二人とも新田先生の話を思い出し、お互いに顔を見合わせたものである。

だが、コンラッドの件など、先生にとっては、ほんの発端に過ぎなかったらしい。最終講義の際、先生は、全世界の日照データに関するソ連の気象研究を調べたり、果ては日照に関する故事ことわざを辞典で探したことを、面白おかしく話されたが、コンラッドの話を知るわれわれにとつて、それは笑い話どころか、恐怖以外の何ものでもなかった。「誰がどのように述べているか、ではない。真実そのものを知りたいのだ」という先生の徹底的にストイックな学問的姿勢と比べて、われわれがいま行っている作業の、なんと志の低いことか。

先生からわれわれはたくさんのお手柄を学んだ。先生はオペラを愛した。ベルナル・ビュッフェの絵を愛した。退職される年の春、歩きながらの雑談で、話題が故郷の原風景の話になって、「雪はいいね。不純なものを全て覆い尽くすから」と言われた、そのときの先生は哲学者で詩人であった。われわれは、本当に素晴らしい師にめぐり会えたのだった。

法学部助教授 七 戸 克 彦